

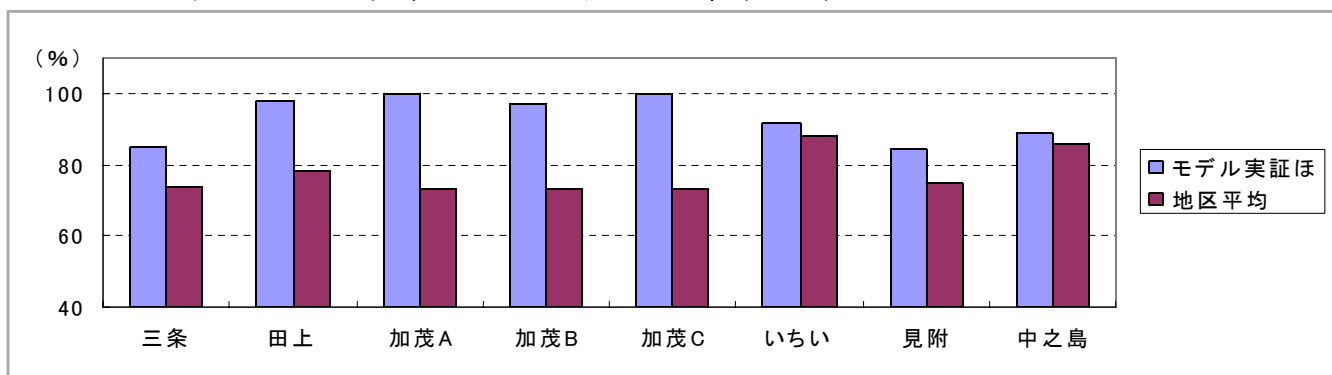
## 平成19年産米の品質向上の取り組みは、土づくりから

平成18年産米は、こしいぶきについては、平年並の品質が見込めるものの、コシヒカリについては、登熟期の高温障害等により、著しい品質低下がみられました。今年の稲作管理をもう一度振り返り課題を整理するとともに、次年度稲作の第1歩として、積極的に土づくりに取り組みましょう。

### 1 土づくり肥料(なんかんソイル元気など)を積極的に施用しましょう

- 土づくり肥料は 稲わら等の分解を促進する効果があります。  
特にりん酸、ケイ酸などの不足するほ場では積極的に施用しましょう。
- 土づくり肥料の施用例 なんかんソイル元気 60kg/10a (稲わら・籾殻をすき込む前に散布)

土づくりモデル実証ほにおける1等米比率 (H17 JAにいがた南蒲)



○土づくり肥料を施用したモデル実証ほでは、米の1等級比率が地区の平均より高い。

### 2 稲わら・籾殻の秋すき込みのポイント

秋すき込みは10月20日までに稲わら等を分解する微生物は、地温が高い時に活動するので、10月20日頃までに行いましょう。

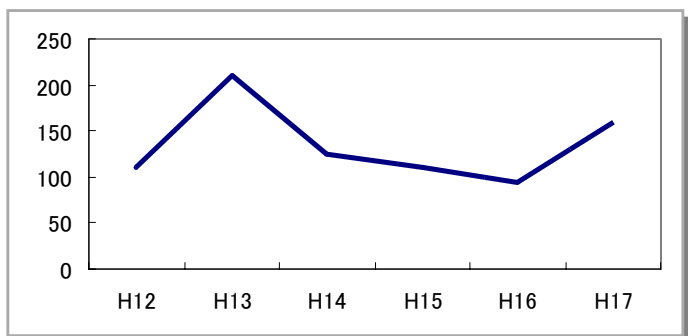
籾がらも土づくり効果があります  
籾がらの分解はゆっくりとしか進みませんが、長期的には土壌の物理性を改善する効果があります。

すき込みは5~10cm程度の浅うちで稲わら等の分解には酸素が必要です。作業性の点からも浅うちが適しています。排水の悪い水田では、すき込み後に排水溝を作り地表水を排除しましょう

稲わら・籾殻は、大切な有機資源です。有効に活用し、消費者から求められる環境保全型農業を実践しましょう

### 3 稲わら等焼却防止運動展開中

稲わら等焼却による苦情件数 (新潟県)



○平成13年から減少傾向にあった煙害の苦情件数が、ごく一部の生産者の焼却により、平成17年度は増加となりました。

○「なんかん米」のイメージアップのために、稲わら・籾がらは焼却しないで土づくりに活用して、消費者の皆さんに「環境にやさしい農業を実践しています」とアピールしましょう。

前回使用した農薬が散布機具に残っていると薬害や他作物への農薬残留等をおこすことがあります。散布後は、使用した散布機具に農薬が残らないようしっかりと洗浄し保管しましょう。